

鑑賞・現代短歌二

葛原妙子

稲葉京子

鑑賞・現代短歌 二

葛原妙子

稲葉京子

著者紹介

稲葉京子（いなば・きょうこ）

1933年（昭和8年）愛知県生まれ。

中部短歌会所属。

1981年『槐の傘』で第6回現代短歌女流賞受賞。

歌集『ガラスの檻』『柊の門』『槐の傘』『桜花の領』

『しろがねの笙』『沙羅の宿から』

評論集『現代短歌の十二人』（共著）

葛原 妙子〈鑑賞・現代短歌2〉

1992年4月20日 初版

1993年3月20日 再版

定価 1800円（本体 1748円）

著 者 稲 葉 京 子

発行者 本阿弥秀雄

発行所 有限 会社 本阿弥書店

東京都千代田区猿樂町1-3-6 小宅ビル 〒101

電話 03(3294)7068(代) 振替 東京0・164430

印刷 ㈱信毎書籍印刷 製本 ㈱山田製本印刷

© Kyoko Inaba 1992 printed in Japan

ISBN 4-89373-049-5 C0092 P1800 E

鑑賞・現代短歌二 葛原妙子 * 目次

I 秀歌百首鑑賞……………一三

『橙黄』

- アンデルセンその薄ら氷に似し童話抱きつつひと夜ねむりに落ちむとす……………一四
- 南瓜の種煎りて与ふる夜長なりさびしきいくさのことは銘せよ……………一六
- 竹煮ぐさしらしら白き日を翻す異変といふはかくしづけきか……………一八
- 十月の地軸しづかに枝撓む露の柘榴の実を牽きてあり……………二〇
- 灰色のけぶれる猫よまなこ青みしづかにきたる春の燈のもと……………二二
- サラブレット種嘶きたかくふるはする大氣の冷えのむらさきを感じず……………二四
- 奔馬ひとつ冬のかすみの奥に消ゆわれのみが果々と子をもてりけり……………二六
- わがうたにわれの紋章のいまだあらずたそがれのごとくかなしみきたる……………二八
- 橙黄色の花筒仄明かる君子蘭昏れながき微光を背後に持てり……………三〇
- 青銅の小さき時計が時刻む怖れよ胡桃は濃き闇に垂れ……………三二

『縄文』

- 医家の庭掘りあるときのシャベル音異形のものにつきあたりたり……………三四
- 床に散るキング、スベイド山屋にしのび入りトランプを切りし一人あり……………三六

狂熱のごとき孤独は兆さむか山の孤屋にこがらし聞けば……………三八

徴兵とふ一語ひびくに敏き者敏からぬ者ラジオを聞けり……………四〇

卓上に置かれしいづれも白くして秋の手紙の嵩うすきなり……………四二

ヴィヴィアン・リーと鈴ふるごとき名をもてる手弱女の髪のなびくかたをしらず……………四四

縄の文父にはなきやまはだかに立ちてあゆめることにもになきや……………四六

『飛行』

長き髪ひきずるごとく貨車ゆきぬ渡橋をくぐりなほもゆくべし……………四八

夫がかたへにものを食しをるしばしなりつめたき指に箸をあやつり……………五〇

しづかなる奔足は起るあかつきに一病棟の森閑の中……………五二

糸杉がめらめらと宙に攀づる絵をさびしくこころあへぐ日に見き……………五四

マリヤの胸にくれなあの乳頭を点じたるかなしみふかき絵を去りかねつ……………五六

落しきし手套の片手うす暗き画廊の床に踏まれあるべし……………五八

おほき薔薇の花弁の縁捲きそめぬかさなれる臉とリルケは言はむ……………六〇

謝罪すべきいくばくの生活とめつむれりしかあり、やがて更に瞠き……………六二

ふしあはせなるいくつの貌を蔽さんに夜空にかざしし黒きかうもり……………六四

恋の工吹きしならむよボヘミヤの玻璃は滴のごとく脆かり……………六六

椿の花の赤き管よりのぞくとき釘深し磔刑のふたつたなひら……………六八
うはしろみさくら咲きをり曇る日のさくらに銀の在処おもほゆ……………七〇

『薔薇窓』

薄暑ある幻燈の中かすかなるゑまひたまちしわれのあらはる……………七二
寺院シャルトルの薔薇窓をみて死にたきはこころ虔しきためにはあらず……………七四
愛されず 人を愛さず 夕凍みの硝子に未踏の遠雪野みゆ……………七六

『原牛』

あくがれてきつるにあらね ゆきずりの小さき御堂に人充ちてをり……………七八
あやまちて切りしロザリオ転がりし玉のひとつひとつ皆薔薇……………八〇
死神はてのひらに赤き球置きて人間と人間のあひを走れり……………八二
胡桃ほどの脳髓をともしまひるまわが白猫に瞑想ありき……………八四
青き木の実の憂愁匂ふうつくしき壮年にしてめとらざりにき……………八六
わが服の水玉のなべて飛び去り暗き木の間にいなづま立てり……………八八
薄命ならざるわれ遠くきて荒海の微光をうつすコムパクト……………九〇
原牛の如き海あり束の間 卵白となる太陽の下……………九二
黒峠とふ峠ありにし あるひは日本の地図にはあらぬ……………九四

築城はあなさびし もえ上る焰のかたちをえらびぬ 九六

拡大鏡ふとあてしかば蝗の顎ありし 蝗の顎は深淵 九八

星と星かち合ふこがらし ああ日本はするどき深夜 一〇〇

かの黒き翼掩ひしひろしまに触れ得ずひろしまを犠として生きしなれば 一〇二

墓石はなにの中心 雪はだらなるひるにおもへる 一〇四

『葡萄木立』

水中より一尾の魚跳ねいでてたちまち水のおもて合はさりき 一〇六

美しき雲散らばりしゆふつかた帝王のごと機関車ゆけり 一〇八

たれかいま眸を洗へる 夜の更に をとめごの黒き眸流れたり 一一〇

青虫の目鼻かすけき切創に似つつうすらに蕪吐くあはれ 一二二

うすらなる空気の中に実りある葡萄の重さはかりがたしも 一二四

口中に一粒の葡萄を潰したりすなはちわが目ふと暗きかも 一六

いまわれはうつくしきところをよぎるべし星の斑のある襞を下げて 一八

おほいなる雪山いま全盲 かがやくそらのもとにめしひたり 二〇

美しき把手ひとつつけよ扉にしづか夜死者のため生者のため 二二

晩夏光おとろへし夕 酔は立てり一本の壘の中にて 二四

鴨は胸をかきむしる鳥 あかるき銃声にますぐに落つる鳥 一二六
 明るき昼のしじまにたれもゐず ふとしも玻璃の壺流涕す 一二八
 みどりふかし母体ねむれるそのひまに胎児はひとりめさめをらむか 一三〇
 美しき信濃の秋なりし いくさ敗れ黒きかうもり差して行きしは 一三二
 胎児は勾玉なせる形して風吹く秋の日発眼せり 一三四

『朱壺』

西湖畔西冷印社の朱泥を購ふときまさに西のそら冷えるたり 一三六
 わがめがねひだりの玉の脱け落ちてしづくのごときは垂りしとおもふ 一三八
 肉親の汝が目間近かに瞬くをあな美しき旅情をかんず 一四〇
 あな遠く市街の中空にくるま流れ玉虫ほどのひかりとなりゐき 一四二
 楽想に似たらずやかのマンモスが黄色の和毛もちてゐしこと 一四四
 書に移すひと日ありけり書のあひにをとめなりにしわが声ひそむ 一四六
 疾風はうたごゑを攫ふきれぎれに さんた、ま、りあ、りあ、りあ 一四八
 ゆふぐれにおもへる鶴のくちばしはあなかなすかなる芹のにほひす 一五〇
 かくおもたき母の睡りをいづかたに運ばむとわが子の姉妹ささやく 一五二
 ひえびえとかひこの毒を感じしむ絹の衣ながく纏へる汝は 一五四

子供はつくづくとみる 己が手のふかしぎにみ入るときながきかも 一五六

他界より眺めてあらばしづかなるのとなるべきゆふぐれの水 一五八

ちゃんねるX点ずる夜更わが部屋に仄けく白き穴あきにけり 一六〇

雁を食せばかりかりと雁のこゑ毀れる雁はきこえるものを 一六二

水の音つねにきこゆる小卓に恍惚として乾酪儼びたり 一六四

わが右手はたらきながらひだり手の停りて知る除夜の静寂 一六六

剝製となりし磯鳴いつはりのちひさなる火をひとみに点ず 一六八

『鷹の井戸』

みゆるごとしみえざるごとし床を這ふあさがほの手の千の収奪 一七〇

薄ぐらき谷の星空金銀交換所とぞおもひねむりし 一七二

いかなる意味あるならねども肘つきしわがもろ手もてかほを掩ひぬ 一七四

みゆるごとあらはれながらとこしへにみえざるものを音といふべき 一七六

げに麦はおんがくを聴くことありて麦生戦ぐといふにあらずや 一七八

めぐすりを差したるのちの瞑目に破船のしづくしたたりにけり 一八〇

しみじみと聞きてしあればあなさびし暗しもよあな万歳の声 一八二

犬憂へ曳かれたりけりアルプスの斑おほいぬ市街を曳かる 一八四

不可思議のちからとせよ祖母がなんちのかうべに置きたる片手……………一八六
 大き鷹井戸出でしときイエーツよ鷹の羽は古き井戸を蔽ひしや……………一八八
 雲の氾濫はげしき昼に睥うごくモナ・リザ・ダ・ジョコンダの像……………一九〇
 嵐、とわれは呟く濃緑の大甕にながれるる釉薬……………一九二
 わがおもてことざまなりや童女いふ「死ぐときも口紅つけてる？」……………一九四
 枇杷は人の病呻吟に育つとふおそろしき説なしとせなくに……………一九六

『をがたま』

わがこゑのカセットより流れいでわが生前の声となりゐつ……………一九八
 月光は受話器をつたひはじめたり越前岬の水仙匂ふ……………二〇〇
 わがねむる木の間の臥床にとほからず老いたる星の大集団……………二〇二
 重低し汝がかたはらにわが靴はたがひちがひにあゆみぞいづる……………二〇四
 しづかなる大和の寺を覗きみぬ聖娼婦百済観音の足……………二〇六
 老妹は死者に侍らふ いふべくは死者を付さん者と侍らふ……………二〇八
 ハム薄く切りつつぞをりちひさなる豚の臉のごときも切りたり……………二一〇
 なみだ流れ ながれやまずも ここにして 目光れる少年を見ず……………二一二

Ⅱ 秀歌三百首選	二一五
----------	-----

葛原妙子略年譜（林市江編）	二四一
---------------	-----

あとがき	二四七
------	-----

装幀 山岸義明

葛原妙子

鑑賞・現代短歌二

I
秀歌百首鑑賞

アンデルセンその薄ら氷に似し童話抱きつつひと夜ねむりに落ちむとす

晶々『橙黄』

葛原妙子については折に触れて歌の出発の遅かったことが語られるが、それはいわば事実そのままを語っていると同時に、短期間に大成したことを証明する意味あいをもっていると考えていいだろう。第一歌集『橙黄』（昭和25）は昭和十九年八月より二十五年九月に至る作四百九十五首を収める。

このアンデルセンの童話の一首は、「昭和十九年秋、单身三児を伴ひ浅間山麓杳掛に疎開、防寒、食料に全く自信なし」とこの歌集の冒頭で作者が述懐している疎開時代に作られた、最も初期の作品の一つである。次のような歌と並んでいる

幼な顔凭りつついねむ膝にして月晶々と水の如きあり